

心構えは出来ているでしょうか

ルカ14:25~33 / 李正雨師

この世界のすべてのことには、一定の心構えをするのが必要だと思います。心構えなしに衝動的に何かを始めたら、後悔や失敗をしがちだからです。もちろん、何かを始めるためには、ある程度の衝動も必要です。ルターの宗教改革も、このある程度の衝動によって起こったことですから。しかし、ルターが宗教改革を起こすまでは、多くの心構えができていたと思います。裁判官ではなく、修道士になるための覚悟、教える教授になるための準備、教皇と司教の命令にも95か条の論題を撤回しなかった勇氣など、多くの心構えがありました。そしてこのような心構えの上に宗教改革が起こり、彼の改革は、ドイツとヨーロッパ全域に広がりました。そのため、宗教改革は単なる衝動だけではなく、心構えによって起きたことだと見る必要があります。そして、今日の福音書もこの心構えと関連している言葉です。

今日の福音書は、「大勢の群衆が一緒について来たが」という言葉から始まります。ここで「大勢の群衆」とは、イエス様の行なったことを見て、イエス様に従っていた人々のことを指します。当時のイエス様は、センセーションを巻き起こす人でした。イエス様の教えは新鮮で、イエス様の行動は、よどみがありませんでした。律法学者たち、ファリサイ派の人々と議論され、社会から疎外された人たちと共におられ、病者を癒されました。それで、既存の教えに疲れを感じていた人々、社会に不満を持っていた人々、変化を夢見ていた人々は、イエス様に従いました。ファリサイ派やサドカイ派のように、イエス様を中心にした新しい勢力ができたのです。今日の福音書でイエス様に従っていた「大勢の群衆」も、このような人々だと思います。

しかし、イエス様は彼らに、父、母、妻、子供、兄弟、自分の命さえ憎まないと、ご自分の弟子ではありえないと言われます。この言葉だけを置いて考えてみると、イエス様の要求は、とても非理性的で、可笑しいと見ることができます。もちろん宗教というものは、ある程度非理性的な面を持っています。しかし、憎しみを求める宗教は、非理性的なものではなく、奇妙なものです。さらに、イエス様はご自分の教えの中心を「愛」に置きました。神を愛し、隣人を自分のように愛すること、これは、イエス様が私たちに教えてくださった最も重要な戒めです。しかし、なぜイエス様は彼らに憎しみを語られたのでしょうか。憎しみを通してご自分に従う人々の心をもっと結束させようとなさったのでしょうか。それとも、弟子たちに心構えをさせるために憎しみについて言われたのでしょうか。

私は、この言葉を理解するためには、まず原語を読む必要があると思います。私たちの聖書に「憎む」と翻訳された言葉は、原語で「ミセイ(μισέω)」と言いますが、これは、憎むという意味よりは「少しだけ愛する」という比較の意味を持っているそうです。つまり、イエス様は、この「ミセイ(μισέω)」という言葉を通して、自分の考えや希望に応じてイエスご自身に従ってはならないと言われるのです。人にとって自分の考えや信念、家族はとても大切なものです。これを守るために、私たちは最善を尽くして生きていっても、過言ではありません。ですから、むしろこれらのことは、私たちがイエス様に従うことを妨げます。自分の考えが、自分の家族が、私たち人にとっては最高だからです。ですから、イエス様は、このようなことをご自分の教えよりは、少し減らして愛しなさいと言われていています。自分の基準を捨ててイエス様に従うこと。これがイエス様をご自分に従っている人々に望んでおられるのです。このようなイエス様の言葉は、次の節である27節により詳細に現れています。「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」

十字架は神様の御心を表しています。神様は私たちの救いのためにイエス様をお遣わしになり、イエス様はこの十字架を背負って、神様の御心に従いました。フィリピの信徒への手紙2章8節には、こう書かれています。「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」これは、十字架が神様

の御心であったことを、イエス様がこの御心に従ったことを教えてくださる言葉です。この十字架に従うことは、イエス様にとっても容易ではないことだったと思います。イエス様はこのために祈り続け、何度もご自分の不安な気持ちを弟子たちに示されました。マタイによる福音書26章のゲツセマネの祈りは、このようなイエス様の気持ちをよく描写しています。自分のものを捨てることは、決して簡単なことではありません。しかし、イエス様はご自分が神様の御心に従ったように、私たちも自分の考えを捨てて、ご自分に従うことを願っておられます。なぜなら、私たちの考えと信念が従っているものは、結局、自分の義であり、十字架や神様の御心ではないからです。

イエス様はご自分に従っている人々に、2つのたとえを話してくださいます。1つは、28節の塔のたとえであり、もう1つは、31節の戦争のたとえです。この二つのたとえで、共通して登場する文章が一つあります。それは「腰を据えて」という文章です。イエス様に従う人は「腰を据えて」自分が何に従っているかを考えてみなければなりません。まだ自分の考えに従っているか、イエス様に従うという名のもとに他のことに従っているのではないかを深く考えてみなければなりません。そうしなければ、結果が悪くなるからです。28節には塔のたとえが書かれていますが、実際、このたとえは、塔のことではなく、エルサレム神殿の状況をイエス様に皮肉られたのです。エルサレム神殿は、当時エルサレムを治めていたヘロデ大王によって増築されましたが、これは神様のためではありませんでした。ヘロデの目的は、この神殿の増築を通してユダヤ人の心を買ひ、自分の立場をしっかりとすることでした。それでこの増築は過度に計画、進められ、約46年にわたって神殿の外部が補修されました。内部の完工は、AD63年になったので、神殿の増築に約80年以上の時間がかかったわけです。イエス様がお働きになった時代でも、補修工事は続いて行われていました。その間、ヘロデは資金難に悩まされ、神殿の完成を見ずに死んでしまいました。そしてヘロデの息子たちも、ユダヤ人の心に動揺を起こさないようにするため、神殿に莫大なお金をかけなければなりません。そして、そのように完工された神殿は、わずか7年後のAD70年、ローマによって崩されてしまいます。これは、人間の計画と考えがどれほど愚かなことを示していた事件でした。

31節の戦争のたとえも同じです。いろいろな政治的な状況の中で、エルサレムが属しているユダは、AD45年再びローマの直轄領になります。そしてローマの政策に不満を持っていた一部のユダヤ人（熱心党）たちは、AD66年ローマに抗して蜂起しますこの過程でローマと関係进行結んでいた神殿の祭司長と貴族たちを虐殺します。それによってローマとのつながりは全部無くなります。ローマの力をよく分からなかった一部のユダヤ人たちは、ローマの力を軽んじ、エルサレムに攻め込んだローマ軍は、5ヶ月も経たずに、エルサレムを征服してしまいました。この時、数万人が殺され、数千人が捕虜になりました。このことによって、神殿は、いくつかの壁を除いてすべてが破壊されました。当時、蜂起した人々は「これが神様の御心だ」と思ったでしょう。しかし、これも神様の御心ではなく自分の考えであり、彼らはローマによって残酷に殺されました。

神様の御心に従うということ。これは自分の考えを捨てることから始まります。そうでなければ、最終的に私たちは自分の考えに従い、その結果はあまりよくなりません。それで、イエス様はご自分に従っていた人々に、自分の命まで「憎まないなら」と言われたのです。今日の福音書は、自分の計画と考え、下心と意図を持って神様に従うのは、どれほど良くない結果をもたらしているかを教えています。そして私たちに神様にすべてを委ね、十字架を背負うこと、神様の御心に従うことを言います。皆様、十字架を背負う心構え、神様の御心に従う心の準備ができましたか。イエス様は今日の福音書33節で、「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのただ一人としてわたしの弟子ではありえない」と言われます。ここで持ち物は、単に財貨を指すだけではないでしょう。私たちの考え、意図などを捨てなければ、イエス様の弟子になれないということだと思います。すべてのことをイエス様に委ねてください。そして、私たちに与えられた十字架を背負ってください。聖霊が心構えをした皆様を正しい道に導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン